

保育者のストレス要因に関する研究

—職場でのストレス要因と個人的なストレス要因との関連性に着目して—

人間教育専攻

幼年発達支援コース

赤川 陽子

指導教員 木村直子

1. 問題の所在

少子化が進行している現在、保育施設は需要増加傾向にあり、保育ニーズの高まりは拡大、保育は市場化、支援は多様化しつつある。また、かかわりの難しい子どもや保護者の問題も浮上し、他職種の専門的知識や質高い保育の向上を求められており、保育施設への期待や要望は声高い。労働環境が大きく変化する中で、保育士は多くの社会的要請により職務上感じるストレスは高くなり、精神的健康の低下が懸念されている問題は、保育の質の低下や子どもに対して悪影響を与えかねず、それらに対応するため職場ストレスや職員のメンタルヘルスも問題について関心は高まりつつある。⁽¹⁾ 保育情勢が大きな変動を迎えている日本において、職場におけるストレスや個人的な悩みからバーンアウトに至る保育者への支援を検討する必要があると考えた。

2. 研究目的

本研究では、人間形成の重要な期間である乳児期から就学前までの子どもたちを保護者とともに育てる保育者が、職場でのストレス要因と個人的なストレス要因(悩みやコンプレックス)の複合により、保育観や子どもへのよりそいに影響を及ぼしている、保育者のストレス要因について検討することを目的とする。

3. 研究方法

①調査対象

A.B市の公立保育所保育士

私立保育園保育士

A市の無認可保育園保育士

C市の私立保育園保育士

回収数 327部 合計回収率 47.6%

有効回答数 321名 女性 316名・男性 5名

②調査期間 2013年3月

③調査方法 無記名による質問紙調査法

④調査内容

職場でのストレス要因:職場環境・クラス運営・勤務時間・職務内容・職員関係・保護者対応、子ども理解・職業継続理由

個人的なストレス要因:妊娠・出産・育児・不妊・介護・通院・腰痛・生理・健康など
ストレス、バーンアウト

保育観・質の向上:子どもへの関わり・保育観・保育環境・保育の専門性・質の向上

その他:生活ストレス解消法

4. 分析方法

属性とストレス、バーンアウト、職場でのストレス要因とストレス、バーンアウト、個人的なストレス要因とストレス、バーンアウト、ストレス、バーンアウト保育観・質の向上との関連を調べた。

5. 調査結果とまとめ

情緒的消耗感において統計的に関連があった項目は職場でのストレス要因では、保育所(園)の運営、勤務時間中に休憩時間(45分)は実際に取れたか、実際に取得している休憩時間、自宅への持ち帰り仕事は5日程度あったかどうか、出勤だけでなく休日もあったかどうか、保育教材・作成・準備などの保育活動に直接かかわる仕事、指導計画・日誌・生活指導に関する書類作成などの事務的仕事、行事の準備、ここ2ヶ月くらいの忙しさ、保育観意識の比較によるストレス、保護者への肯定的感情演技表現、子どもへの感情の隠避表現、職業継続理由「保育の仕事を誇りに思っているから」、職業継続理由「天職だと思うから」、職業継続理由「生活のため」であった。個人的なストレス要因では、現在、または過去に子育てをしたことがあること、我が子を他に預けて仕事をするつらい気持ち、腰痛による健康被害、生理的症状による健康被害、慢性的健康被害の自覚であった。

脱人格化において統計的に関連があった項目は職場でのストレス要因では、クラスを担任しているか、いないか、管理職であること、勤務時間中に休憩時間(45分)は実際に取れたか、自宅への持ち帰り仕事は5日程度あったかどうか、保育教材・作成・準備などの保育活動に直接かかわる仕事、保育観意識の比較によるストレス、保護者への肯定的感情演技表現、子どもへの感情の隠避表現、職業継続理由「子どもが好きだから」、職業継続理由「保育の仕事を誇りに思っているから」、職業継続理由「天職だと思うから」、職業継続理由「生活のため」、職業継続理由「他の仕事に向いていないから」であった。

個人的達成感において統計的に関連があった

項目は職場でのストレス要因では、雇用形態、クラスを担任しているかいないか、担任しているクラスに対応などに注意や時間を必要とする幼児がいるかいないか、肯定的な感情の素直な表現、職業継続理由「子どもが好きだから」、職業継続理由「保育の仕事を誇りに思っているから」、職業継続理由「天職だと思うから」、職業継続理由「勤務条件(勤務時間など)がいいから」、職業継続理由「生活のため」であった。個人的なストレス要因では、配偶者またはパートナーがいるかどうか、妊娠・出産経験があるかどうか、現在、または過去に子育てをしたことがあること、我が子を他に預けて仕事をするつらい気持ち、勤務中に要介護者のことが気になること、生理的症状による健康被害、慢性的健康被害の自覚であった。

ストレス・バーンアウトと保育観・質の向上において統計的に関連があった項目は、情緒的消耗感では4項目、脱人格化では4項目、個人的達成感では3項目であった。

ストレスフルな職場で働く保育者は個人的なストレス要因もあるうえに持ち帰り仕事によりストレスの慢性化を導いていた。今後の課題としては、保育者が抱える問題を抽出しやすい新たな尺度の作成が必要である。また、保育施設と幼稚園の一体化を踏まえ、幼稚園教諭対象のストレス調査を行い、保育士の要因と合わせた問題点の議論が急務である。

注

1) 赤田太郎・滋野井一博・小正浩徳・友久久雄(2009)保育士のストレス要因と保育の労働環境に関する研究～身体的苦痛のストレス、保育上のストレス、家族関係のストレス、精神的健康状態、満足度を通して～龍谷大学教育学会紀要 第8号